

眞理はあつても悉く賛成することは出来ないと思ふ。支那文明よりも更に優秀な文明に接した時には彼等はそれを攝取もすれば、影響も受けて居ることは前にも述べた通り其の例決して少々ではないのみならず、近時の支那の情態を観察してもよく此間の消息を知る事を得ると思ふ。要するに北方民族の治下に在つては漢人はそこに自分のよりも勝れた文明を見出さず、そうして北方民族にはこれと反對に文明といへば支那の文明より知らなかつたのである。だから新に勢力を得る事になる民族は、丁度先に申上げた金の太宗の場合に於けるが如く、政策上或る拘束の要はあつても漢文明に通ずるといふことが誇りでもあり、理想でもあつたのである。それで成るべく自分達の固有の文化を維持することに努めながらも、自然と漢文明の影響を受けるやうになつたのは寔に已むを得ぬのであります、況や積極的に支那文明を導き入れようといふ方針を執る場合には、悉く支那文明に化せられてしまふといふことは極めて自然の勢である。

六

然るに茲に一つこれ等の諸朝廷と異つて、支那に君臨して而も遼とか金とかいふやうな支那の北方だけを占領したのでなく、支那の全體を自分の勢力範囲に入れてしまひながら、然も支那の文明の感化を甚だ受けなかつた所の一つの朝廷がある、是は即ち元の朝廷である、蒙古が支那に來て立てた所の朝廷は、他の北方民族の建てたのとは大に異つて全く別な行き方をして居る、尤も元の朝廷と申しましても必ずしも支那文明を蹂躪したものでない、支那文明の存在を否定したものでない、それで歴史を御覽になれば、表面には元の天子も支那の文藝學問を尊重